

## 産業医

## 第6回

株式会社電通国際情報サービス(ISSID)

みやした たく

## 産業医 宮下 琢 氏

## ISSIDに特化した産業医

私は1988年に愛媛大学を卒業し、循環器医をめざして帝京大学の内科に入局しました。ところが感染症学の教授からボトルキープのウイスキーを頂戴したことがきっかけとなり、そのまま感染症医になってしまいました。平凡なウイスキーであったにもかかわらず心が舞い上がってしまったのは、若さゆえの懐かしい思い出です。

当時、感染症学は内科学の中でも隅っこの領域で、あたかも恐竜時代の哺乳類のように、私たちは医局の中で人



知れず生息している小さな集団に甘んじていました。その後、院内感染という概念が輸入されると、いきなり厳しい矢面に立たされることが多くなり、そうした中で患者を守りつつ病院を維持するという視点が鍛えられました。現在われわれ感染症医は、個を見て全体を保つことを本来の使命と受け止めており、そのような院内感染対策の極意が、今日の産業医活動に非常に役立っていると感じています。

産業医の資格は、当時の流行に乗じて取得したものです。一時期臨床医の間で産業医の免許を取った方がよいとの噂が流れ、産業医が何たるかも知らぬまま資格を取得しました。そんな不謹慎な私に、電通国際情報サービス(ISSID)のメンタルヘルス担当の医師から、内科の産業医を探していると声掛けがあったのは、運がよかったと思います。抜け目なくその場で自分を売り込んだことから、ISSIDとのお付き合いが始まりました。あれから15年。自分も何とか産業医の端くれとして活動できるように成長してきました。

幸運にしてISSIDは執務室のみの職場で、重機を用いたり危険な有機溶剤を扱うことはなく、また健康管理室が細部にわたり機能していることから、私にも長期間務められたのだと思います。今では社員の方々の顔もわかるようになりました。途中、研究に蹉跌(さつたつ)した私は、大学を辞し、クリニックを開業しました。開業医には昨今かかりつけ医としての機能が求められています。が、産業医についても単なる産業医ではなく、ISSIDに特化した産業医であることを自負しています。

## 「人間らしさ」を判断基準に

組織を健全に保つには、個別の訴えのみに過度に流されてはうまくいきません。物事の判断基準に普遍性が求められるのです。私はその点で「人間らしさ」を重視したいと考えています。定時勤務の人でもその内実が人間らしくなければ問題ですし、逆に時間外労働が見られても、それが人間として輝きを放つ生活ならば、ある程度目をむむるという態度です。規則を軽視するのではなく、人間あつての規則であることを意識したいと考えます。

人間らしさの本質については、私は2つの話を参考にしています。第1は人間存在を苦と捉えて、その苦を「思い通りにならないこと」と定義した、紀元前の初期仏教の人間観です。確か

に私たちの生活を振り返れば、思い通りにならないことばかりです。逆に思い通りになることばかりだったとすれば、それは人間の生活ではないということになります。

第2は明治期の教育者、新渡戸稲造が説く「一人前」の話です。彼は人の能力を容器に例えて、一人前とはその器を満たすべく全力で挑むことと論じています。器の大きい人が手を抜いた場合、仮に小さい器を満たしている人の方が人間的には上であるとする見解です。私は人間らしさを探求するには、このような先人の思想を看過してはならないと考えます。

現在、産業医活動の一環として真剣に取り組んでいるのは、健康管理室が全社員に発信しているメールマガジンに、毎月1回文章を寄せることです。開始して7年が経過しました。内容は日常の平凡な出来事を題材に、いのちを支える臨床医の立場から、自分が感じたことや考えたことを記しています。ISSIDの社員は一日中パソコンと向き合っているため、ちよつとした休憩時間にそれを読んで、アナログ思考を取り戻してもらうことが目的です。つまりこれは、私が全社員にあまねく提供できる「医療」なのです。多忙な日々の中で、生き方や人生を振り返る端緒となってくれば嬉しく思います。